

濱田隆士先生の御逝去を悼む

佐野晋一



写真1. 2000年7月撮影。福井県立恐竜博物館提供。

日本古生物学会名誉会員・濱田隆士先生は、病氣療養中のところ、2011年1月19日に御逝去されました。享年77歳でした。濱田先生といえば、さわやかな笑顔と軽妙な語り口でお話をされている姿がまず目に浮かびます。先生に二度とお会いできないかと思うと非常に残念でなりません。

先生は、1933年2月3日に宮崎県延岡市に生まれ、幼少期を過ごされたのち、御尊父の仕事の関係で、旧制中学在学中に東京へ移られました。1955年3月に横浜国立大学学芸学部を卒業後、東京大学大学院数物系研究科地質学専門課程に進学、1960年3月に理学博士号を取得され、4月から東京大学教養学部地学教室に助手として奉職されました。1966年9月から1968年3月まで、アメリカ・カリフォルニア工科大学のA. J. Boucot先生のもとで、交換研究員として在外研究をなされました。1969年に東京大学助教授、1980年に教授に昇任、1993年3月に定年退官され、名誉教授の称号を授与されています。東京大学定年退官後には、放送大学教授として2004年3月まで勤務されたほか、神奈川県立生命の星・地球博物館では1995年1月から2000年3月まで、福井県立恐竜博物館では2000年7月から2005年3月まで、それぞれ初代館長として務められました。このほか、財団法人日本科学協会の理事長などを長年務められています。

先生の東大退職時までの業績や「研究史」は「濱田隆

士教授 退官記念論集（1994年12月発行：非売品）」中に詳しく記述されています。1993年3月末の段階で、地質学・古生物学分野の論文160編、著書・翻訳書等34編、このほか普及関係の文章200編以上を数えています。先生は、東京大学定年退官直前には、御専門を「地史・古生物学、地球環境変遷史」と表記されていたらしいしました。地質学・古生物学の枠にとらわれず、博物館学や生涯教育から、システム基礎科学や映像生物学、さらには地球環境問題や科学技術社会論までと、幅広い分野で御活躍されました。特に、多数の編著書や訳書、テレビ番組の監修・出演、博物館展示や展覧会の監修などを通じて、古生物学という学問のすそ野を広げる面での貢献には特筆すべきものがあります。先生が関わられたあまりに広い分野をカバーするのは荷が重く、この追悼文は、筆者が見聞きした範囲で、先生が積極的に関わられた古生物学に関連する幾つかのトピックを紹介させていただくにとどまることを御了承願います。

古生代中期の化石の研究

先生は、横浜国立大学の鹿間時夫先生のもとで研究をスタートされ、進学された東京大学大学院では、小林貞一先生のもとで、クサリサンゴを中心とする古生代中期の化石の研究、さらには、それに立脚した日本のシルル・デボン系の地史的意義の解明に取り組まれました。「西南日本外帯ゴトランド系（現在のシルル系）の層序と分帯」としてまとめられた、これらの研究により1960年に理学博士の学位を、また日本地質学会研究奨励賞を授与されています。このときに、先生が用いられた、例えばG3層という区分は現在でも用いられることがあるようです。

その後も、東南アジア古生物研究会の活動、あるいは「日本産三葉虫類とその随伴化石」プロジェクトを通じて、小林貞一先生をはじめとする共同研究者とともに、東南アジアおよび東アジアの古生代の腕足類や三葉虫に関して、古生物学会特別号5冊（中国東北部のデボン系腕足類；日本産三葉虫（シルル紀、デボン紀、石炭紀、ペルム紀の4分冊））をはじめ、多数の論文を公表され、1971年には、先生の「古生代三葉虫及びサンゴの研究」に対して、日本古生物学会学術賞を授与されています。また、長い間、国際的なシルル・デボン系の層位学委員会の委員としても活躍されました。

沼サンゴ層と北限のサンゴ礁

先生は、1960年代から70年代前半にかけて、千葉大学文理学部での非常勤講師を務められ、このときに、学生さんと一緒に千葉県南総地域の沼サンゴ層の調査研究を実施されました。「千葉県地学図集第4集 サンゴ編（1963年）」や幾つかの論文にまとめられています。研究を通じて明らかにされた、冬季の海水温が低すぎるために、海

面まで成長する「礁」を形成しえない、「北限のサンゴ礁」のイメージは、現在の東京湾に生息するサンゴ群落の姿を明らかにすることにつながり、さらに、地質時代の造礁性生物の分布や古生物地理学的意義を考える上でも重要な貢献となりました。

原色化石図鑑

1966年に、益富寿之助先生との共著で、多数のカラー図版を利用した原色化石図鑑を保育社から刊行されました。カラー図版の図鑑は類例がなかっただけでなく、標本の解説自体も「読み物」としても楽しめる画期的なものです。刊行から20年近くがたった、筆者の高校時代にも、図書館で様々な古生物について調べるときに最も重宝した「書籍」でした。周囲にも、子供のころにバイブルとして熟読していたという話をしばしばききます。また、この図鑑の影響を受けて、収録された標本を一式揃えようと熱心に化石のコレクションをはじめた、という話もきいたことがあるほどです。余談ですが、「三葉虫」のことを、わざと「みつばむし」と呼ぶ人がたまにいますが、本書の「三葉虫はみつばむしではない」という説明文に薫陶を受けてのことのようで、これも、「原色化石図鑑」の面白さ、影響の広さを物語る事例だと言えます。

全国の地元化石研究者・愛好家とのつながり

先生は、幼少のころから鉱物に興味を持つなど、鉱物をはじめ、化石、貝類や漂着物など、様々な標本の採集や収集に努められてきました。先生がお書きになられた御自身の研究史を振り返る著作や講演録を読むと、在野の研究者として著名な益富寿之助先生と桜井欽一先生の薫陶を受けたことが必ず特記されており、幼少のころからコレクターの素養がおありだったものと思われまふ。化石好きなら必ず目を通す「原色化石図鑑」の影響、あるいは先にもあげた「日本産三葉虫研究プロジェクト」の活動などを通じて、多数の地元の化石研究者・愛好家とのつながりを持たれ、それが小学館の「日本の化石(1983年)」などの出版へとつながっていったようです。先生のフットワークが軽く、誰でもわけへだてなく接するお人柄が、全国に多くの協力者、共同研究者を獲得し、研究ネットワークの構築へとつながっていったのでしょう。

貝拾いからオウムガイへ

大学在籍時から始められた「貝拾い」は、東南アジア調査時に打ち上げられたオウムガイ遺骸の発見、日本における漂着遺骸の分布調査、そして、その古生態学的・生物地理学的意義の考察へとつながったようです。遺骸の漂流によって生息範囲よりもはるかに広範囲に漂着遺骸が分布すること、破損した漂着遺骸が海岸の高潮線よ

りも標高の高い場所で見つかることが多いこと、などに注目されました。これらの事実は、化石オウムガイやアンモナイトのタフォノミーや分布を議論した論文にもしばしば引用されているのを見かけます。

オウムガイは、今でこそあちこちの水族館で飼育されていますが、1976年に、現在は閉鎖された「よみうりランド海水水族館」において日本初公開され、さらには世界初の通年飼育も達成されました。当時は珍しいオウムガイを観察するチャンスを古生物学などの研究に生かそうと「生きている化石—おうむがい—総合研究専門家協議会(JECOLN)」が結成されると、先生もメンバーの一人として共同研究に参画され、当時は謎とされていたオウムガイのライフサイクルの解明などに貢献されました。研究に必要となるオウムガイを入手するために、ニュー・カレドニアにも何度か足を運ばれたようです。設立に貢献された教養学部の基礎科学科第二(システム基礎科学)における、1980年代の三宅島の火山島システムの総合調査の中でも、漂着物調査を丹念に実施されたときいております。

生きている化石から学ぶ

先生は、小林貞一先生から「化石の勉強には生きたものをよく知りなさい」と御指導をいただいたそうです。先生は、1975年に、保育社から「カラー自然ガイド 生きている化石—動物—」を刊行されました。その後も、共同研究者や協力者に恵まれ、オウムガイやカブトガニ、シーラカンスなどの研究プロジェクトに取り組まれました。さらには、放送大学の特別講義や大学の一般学生向けゼミでも「生きている化石」を取り上げられたこともあり、「生きている化石」をキーワードに、多分野にわたる人材育成や研究ネットワーク構築をなされました。これは大事な遺産として、私ども、自称「弟子」たちに引き継がれています。

学際領域の開拓

先生は、本人の言うところの「弥次馬」根性のなせる業でしょうか、地球科学と周辺分野の学際的研究にも御尽力されました。例えば、化石へのX線CTスキャンの適用と「コンピュータ・グラフィックス」による三次元復元は、海外の論文にも先駆的業績として引用されている例を見かけます。また、カメラ好きが発展したのか、ビデオを活用して生物の生態を明らかにしていく手法を「動生態学」や「映像生物学」と呼び、積極的に取り組みました。

地球環境変遷史

先生は、アメリカでの在外研究中に「地球環境」という視座に気付かれたようです。同僚の先生方との議論の中から、東京大学出版会から出版された「宇宙地球科学

(1975年)」や「地球人の環境(1977年)」が生まれました。後者においては、森林資源、石油・石炭、サンゴ礁石灰岩などによる消費と、動物の呼吸のほか、火山活動や人間活動などによる増加により、大気中の炭酸ガスの量が増えること、そして、それにより地球規模の気候変動が引き起こされるという議論が既に述べられています。さらに、東京大学教養学部の後期課程に、地球規模の視野において統合的機能的なマクロサイエンスの研究・教育を、システム科学の手法を用いて取り扱う、基礎科学科第二(システム基礎科学)という新学科の設立(1981年)に御尽力されています。折しも、フィールドとして設定した三宅島の1983年噴火にあたり、成果を文部省科特定研究報告書「火山島の自然環境変遷と、その人為との相互作用に関するシステム科学的研究」としてまとめられました。なお、このような視点に立った、地球科学と周辺科学や社会との関係についての考察は、最終的に「地球科学への招待(1986年)」として出版されています。

科学メディアとの関わりなど

先生は「科学を伝えることの重要性」を強く認識され、日頃から実践に努めていらっしゃいました。「化石」や「恐竜」、「生命の歴史」や「日本列島のおいたち」などについての多数の著書や訳書以外にも、「採集と飼育(財団法人日本科学協会発行)」などの科学普及雑誌の編集委員を長く務められ、地球や生物について特集をしばしば企画、執筆されました。NHKなどでの教育番組では、地球科学ばかりでなく、生物の生態を紹介する番組ですらも、監修者としてしばしば名前をお見かけしました。このほか、テレビやラジオの番組、各地での講演会などで、子供たちの質問に嬉しそうに答えられる姿が印象的でした。大学の講義でも、専門家の育成を目指すのではなく、地学に触れた経験のある人材を広く育てたいと、あえて文科系学生の授業の方に力を入れ、新聞やテレビのニュースを題材に講義する取り組みを長年続けていらっしゃいました。教養学部の所属でもあり、研究者という意味での先生の直弟子と呼べる人は多くはありませんが、これらの活動を通じて、先生の「教え子」は全国に数多く育ったものと思われます。

地球大紀行

1987年に、毎月1回で計12回にわたった大型プロジェクトである、NHK特集「地球大紀行」が放送されましたが、先生は諮問委員として番組に携わるだけでなく、海外ロケにも同行され、世界中を飛び回っていらっしゃいました。また全国8都市を巡回した「地球大紀行展」においても、図録の写真撮影や原稿執筆はもちろん、講演会の講師までも担当するなど大活躍で、大学の地学実習室に展示に利用された翼竜の標本がしばらく置いてあった覚えがあります。現在では、ある程度常識となった感

のある、「微惑星の衝突・集積による地球形成」、「ストロマトライトと光合成による自由酸素発生」、「恐竜絶滅の隕石衝突説」などは、この番組を通じて世間一般に知られるようになったようです。先生は、番組放送の翌年に「地学の受験生が増える」ことを喜んでいらっしゃいました。

また、番組で取り上げられた「生命の星・地球」と「地球環境の危機」という視点のインパクトは非常に大きく、これ以降、先生が、「地球の語り部」として、各地で普及講演活動に盛んに取り組まれる契機となったようです。この後も、1994～95年にかけて放送されたNHKスペシャル「生命 40億年はるかな旅」などにも関わっていらっしゃいます。また、「地球大紀行」や「生命」などの素材を利用して制作され、1998年からNHK教育テレビで放送された「NHKジュニアスペシャル」では地球博士として出演され、この番組で先生を知ったという方もかなりいらっしゃるようです。

博物館との関わり

先生は、東京大学在職中から、駒場キャンパスの教養学部自然科学博物館の運営などのほか、「恐竜展」などの全体監修、各地の自然博物館の展示作成や展覧会映像制作などの監修などにしばしば携わっていらっしゃいました。放送大学に移られてからは、国立大学教員という縛りがなくなり、博物館により積極的に関わることができるようになったと喜んでいらっしゃったのを覚えています。実物資料版「地球大紀行」とでもいうべき展示を有する、神奈川県立生命の星・地球博物館の準備に関わり、開設準備室においては顧問として、1995年からは初代の館長として勤務されました。博物館長としても多才さを遺憾なく発揮され、学芸員の方達と、積極的な地域連携やアウトリーチ、エデュテインメント(エデュケーショ



写真2. 普及行事で子どもと話す濱田先生。2000年10月4日撮影。福井県立恐竜博物館提供。

ンとエンターテインメントを組み合わせた造語）要素の導入、バリアフリー化や、ハンズオン学習の重要性などについて、積極的に発言、また実践され、博物館学あるいはミュージアム・マネジメント分野においても重要な足跡を残されました。このほか、福井県での恐竜化石調査に早い時期から顧問格で参加され、さらには恐竜博物館の基本構想から建設準備までの各種委員会の委員長として、2000年の福井県立恐竜博物館開館以降は館長として、「恐竜王国・福井」の礎を築かれるのに貢献されました。

先生の思い出と言えば、周囲に笑いが絶えなかったこと、フィールドノートの影響で、何にでも小さい字でびっしりと書き込まれること、「磯乞食」などと称して、何でも収集されること、カメラ好きで何でも撮影されること、新しい用語や洒落た略称を考えるのが好きなこと、など枚挙にいとまがありません。また、どんな学生や子供相手であっても、たとえ分野が異なる場合でも「回り道がむしろお勧めだ」と、研究のアイデアや夢を後押しされる姿が印象的でした。直接の弟子ではなくても、東京大学や放送大学の学生サークル（例えば、地文研究会や海洋調査探検部、WOLF：生きている化石研究会）、あるいは東大教養学部宇宙地球科学教室で実施していた地学見学旅行の参加者などからも、先生の薫陶を受けた、数多くの「教え子」研究者も育っています。

博識な先生が活躍された幅広い学問分野、そして、「科学を伝える」努力の全てを引き継いでいくのは事実上不可能に近いかもしれません。しかしながら、様々な分野、場所にいる「教え子」が、それぞれのできる範囲で受け継ぎ、発展させていくことこそが、先生への恩返しになるものと考えております。また、残念ながら、奥様と御自身の病気のため、先生は膨大な資料の整理やまとめを御自身でなさることができませんでした。残された資料をしかるべき機関に納め、整理、有効活用していくべく、関係者が努力しているところです。

先生は、御両親、鉱物学で博士号を取得された信子夫人とともに、山の緑と、空と海の青色が鮮やかな吉祥公園墓地（神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜。最寄駅JR東海

道線真鶴駅）に眠っていらっしゃいます。先生を育まれた相模湾、太平洋のほか、視界の良い日には伊豆半島、さらには先生が高校生のときに噴火の観察に足しげく通われ、のちには火山博物館の建設に携われた伊豆大島までもが望める場所にあります。お墓も、先生らしく地球をイメージしたのか、地元の石材を用いたユニークな形状をしており、先生のお人柄が偲ばれます。この地から「教え子」の頑張りを笑顔で応援していただきたく存じます。御冥福をお祈りいたします。



写真3. 湯河原の吉祥公園墓地にある濱田先生のお墓。

